



TITLE:

須彌山儀考

AUTHOR(S):

的場, 健一郎

CITATION:

的場, 健一郎. 須彌山儀考. 天界 1935, 15(174): 472-474

ISSUE DATE:

1935-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167107>

RIGHT:

須彌山儀考

的 場 健 一 郎

須彌山儀(シュミセンギ)と一口に云つたとて何のことだか判らぬ人が多いだらう。實際須彌山儀は非常に珍稀なもので、日本全國でも恐らく數個は出まいと思はれる。

須彌山儀とは幕末時代に西歐から輸入した進歩的天文學説たる地球自轉説の反對的立場に於て作製されたもので、地球平盤説を唱へた印度天文學説から出てゐるのである。即ち「地球は平たくて、その中心が須彌山で、その周圍に青い山や赤い山が七重に起伏し、太陽と月が動かぬ地球の須彌山を中心にして運行して晝夜を定める」といふ原理によつて作られた一種の時計である。

此の須彌山儀の發明者とも云ふべき人は京都の僧釋圓通で、彼は無外子と號し非常なる尊王攘夷家で、「幕府が夷狄の地球自轉説を採擇するとは怪しからぬ、宜しく地球平盤説に據るべし」と常に慷慨を洩らしてゐたといふ。

そのために幕府の刺客にでも襲はれたものであらうか、彼の晩年は詳かではない。最近大阪の某時計蒐集家の手許で發見された圓通の畫いた須彌山儀の掛軸は木版刷りだが、須彌山儀の研究には見逃せない資料の一である。それは下方に彼の創案に係る須彌山儀を畫き、上方に漢文で説明を加へ、文化十歳無外子と落款を認めてある。日、月、星辰の運行、方位、春分、冬至夏至等の四季、赤道が判る仕掛で、而かも一個の分銅の作用で、總てを動かす装置で、盤の横上方に分銅があり、丈1尺5寸位の點は、先年神戸在住の外人に依り75圓にて300部限定出版されし「英文日本時計發達圖鑑」所載の東本願寺所藏の須彌山儀の寫眞とよく似てゐる。

何しろ高野山の僧侶でも、現在須彌山儀のことを見たり、聞いたりした人が殆どないと云つてもよい位である。私の居村和歌山縣海草郡木本村古屋の正立寺でふ眞宗寺に、加賀の前田侯爵家と東本願寺と、日本で三つしか數へ得ない須彌山儀の一つを所持してゐるが、而かも今より八九十年前の製作とは云へ、最も完備した須彌山儀なのである。然らば何故帝室博物館にさへ存在し

ない斯る珍稀なる什器が片田舎に在るかといふ疑問が湧いて来る故、一通りの來歴をありの儘記して見よう。

明治16年に65歳で亡くなつた現住職の先考^{そうなん}中谷桑南師は若い頃京都の大學林へ佛教習學に上つて居た。或る時師の還中が300人の弟子を集め、現今西洋の忌はしき天文學が入り込んで、延いては我が佛教にも影響せんとして居るが、拙僧には天文學の知識が無き故、誰か天文學を習得して、西洋流の天文學者に對抗して呉れる者は無きかと決死隊士を募つた所、上の中谷桑南師と九州より來れる某僧と僅か2名だけ申出で、二僧は洛外嵯峨の天龍寺に起居して熱心に印度より渡來せる佛説に基く天文學を習得し、それに基き中谷桑南師は京の時計商に、前田家と東本願寺と自己のものと3個の須彌山儀を作製させた。それが現在正立寺に祕藏して居る須彌山儀で東本願寺所藏のものゝやうに、分銅が陣太鼓型の胴體の横上に附いて居るのではなく、胴の中に納まる仕掛になつてゐる。機械は齒車などを使つて甚だ複雑で、一見太鼓を横にした恰好の胴體へ、青貝で蓮の花を象眼せる4脚の臺が着き、胴の中へは機械が据えつけられ、胴の上は地球に型づくり、中央に須彌山があつて、その頂上の圓盤は四季の春分とか夏至とかの時季を細かに刻んで針で指示する如くなつて居り、須彌山の周圍には四方に青金山、赤金山が七重に延びて居て、その一隅に星座が在り、その上方には眞鍮製の丸き大きな輪三つあり、その一つは赤道で、他の二つには各々日と月とが、白玉、赤玉で象づくつて、時刻につれ運行する故、日の夜晝、月の盈虚や潮の干満が分る仕掛だ。地球の丸き周圍には山があり、その附近には未、乾等方角を示す字が彫り付けてある。その横下は地球の下の地層を、風、水、氣、火の4層に分ち青貝で象眼して、表はしてゐる。その部分に圓形の窓があり、昔はその金枠には多分ぎやまん(硝子)が入つてゐたのであらう。その部分は、朔日から30日に至る太陽暦日と、一日の12刻とを刻みつけてあつて、指針が2本あり、長針は時刻を、短針は日を自動的に示す仕掛で、而かも12刻には半の時刻をも印してある。多角形の硝子入りの蓋も附いてゐて全部の高さ2尺5寸ばかり、周圍は4尺以上あり、内部には鐘があつて、明治16年迄は村の代表的な時計として時を報じて居たが、同年三月1日に分銅を吊してゐた絹紐が大音響と共に切れ、三月10日

には、はからずも先考中谷桑南師が亡くなつたといふエピソードを有して居る。彼が單なる僧侶以上に天文學者としての造詣の深かつたことは、明治31年に現住職中谷慧眞師が東本願寺文書寮(現在の龍谷大學圖書館)へ寄贈した天文學に關する和漢古書籍の目録や、右須彌山儀と反對の立場にあつた。當時最も進歩せるものなりし地球儀(それは幕末のものらしく、印度が天竺、猶太がジユデヤと記入されて居る)、星座儀(支那の二十八宿に據れる)、和蘭製羅針儀、望遠鏡等に依り知り得るのである。

兎に角須彌山儀は我國の文化史上、時計の發達、天文學の發達、佛教の變遷の上から見ても、又骨董品として見ても非常に興味のあるものなるにも係はらず、あまりに珍稀なるためにや、未だ詳細なる研究や文獻の發表されて居らぬことは甚だ遺憾と云はねばならない。(終)

本會の總會の歴史

回 數	年 月 日	總會の種類其他	「天界」所載開催地
1—10	第 78號
11	昭和 3 年10月28日	定期總會	第 95號 京都
12	昭和 4 年10月20日	„	第105號 „
13	昭和 5 年10月 ¹⁸ ₁₉ 日	„ 展覽會	第115號 „
14	昭和 6 年11月 ²⁰ ₂₁ 日	創立滿10年記念祝賀會 定期總會、展覽會	第130號 廣島嚴島
15	昭和 7 年10月15日	„ 會名改正	第140號 名古屋
16	昭和 9 年10月20日	„	第164號 京都

本年の北海道の日食に就いて

山 本 一 清 先 生

私も日食には是非見物旁々出かけたいと存じます。かねがね淺野兄とも話合つて居る事でございますが、皆既日食時に於て黒い太陽の東西に黄道光の痕跡的存在でも認められないかと思ふのであります。この事は坂元氏等の間でも問題になつたものであります。今度の北海道の日食のときこれを見究めたく思ふのであります。

八月廿七日

廣 瀬 永 治 郎